

大学デビュー行動が適応感に及ぼす影響の検討

中臺 麗¹ 石井 琴子¹ 関 鋼二¹ 泉水 紀彦²

本研究では、大学デビュー行動を「大学入学を機に意識的に今までとは異なる新しい行動や外見に挑戦すること」と定義し、大学デビュー行動を測定する心理尺度の開発を通して、現代の大学生像の実態を検討することを第一の目的とした。分析対象は大学生計335人（男性128人、女性207人、平均年齢19.72歳）であった。分析の結果、大学デビュー行動尺度18項目において「積極的な対人関係」と「外見や流行への興味関心」の2因子が抽出された。また、大学デビュー行動と大学生活における適応感との関連を検討することを第二の目的として、その他の変数（友人関係満足度、自尊感情、ストレス反応、大学生メンタルヘルス）との関連を検討した。その結果、大学デビュー行動と友人関係満足度に正の相関が見られた。特に下位尺度である「外見や流行への興味関心」については、女性においてのみ、友人関係満足度を有意に予測していた。最後に、これらの結果を受けて、現代の大学生像について議論を行った。

キーワード：大学デビュー行動、友人関係、ストレス反応

問題と目的

平成26年度に文部科学省が実施した学校基本調査によると、小・中学校や高等学校の在学者数は減少傾向にあるものの、大学の在学者数は、依然、増加傾向にある（文部科学省, 2014）。また、同年の調査によると、高校卒業者の短期大学・大学への進学率は50%を超え、山田（2006）は、入学試験方式が多様化するなかで、大学生の学力・パーソナリティも多様化し、もはや大学生は「自主的に学ぶ自立した存在」とは言いえないような未熟性を示す場合も多くなっていると指摘している。人口減少による大学全入時代といわれはじめる中、大学を取り巻く環境が大きく変化すると同時に大学生像にも変化がみられる。

2014年に実施された大学生の意識調査によると、授業の出席を重視する学生が全体の84.7%、履修した授業の成績が気になる学生が92.3%を占め、授業中心の生活で高校までの「生徒」状態を継続していることが指摘されている（全国大学生生活協同組合連合会, 2015）。また同調査によると、人間関係についても、「家族との関係は良好」が92%、「高校までの友人と今も交友が続いている」が85%という結果から身近な人間関係を大切に維持する傾向、「異なる考え方を持った人とでも仲良くできる」が78%という結果から他者に気遣う傾向がみられる。また現代の大学生が使用する言葉（インターネットスラング）からも、大学生像を検討することができる。インターネットスラングと

して代表的に使用される言葉として、「リア充（現実の生活が充実している人物）」、「便所飯（周囲に一人で昼食する様子をみられないためにトイレで昼食を摂ること）」、「意識高い系（自分の能力を実際よりも大きく見せようとするアピールする人物）」などが挙げられる。これらの言葉は、自分と異質の人物を揶揄するための表現となっている。このような調査や言葉から、大学生になっても高校の延長が続き、堅実で安定した人間関係を維持する一方で、自分と異なる他者や集団を揶揄する現代の大学生像が推測される。

本研究では、このような現代の大学生像の実態を明らかにするために、大学入学後の大学生に対して用いられる「大学デビュー」という言葉に着目する。デビュー（debut）とは、フランス語で「1. 社交界・舞台・文壇など公の場に、新人が初めて登場すること。2. 俗に、初めて何かをすること。新たに何かを始めること。」（大辞泉, 2012）を表し、大学入学後に大学1年生が起こす新しい行動を示す言葉である。

大学デビューに関する研究はほとんど行われていない。類似した研究として、高校から大学への移行といった大きな環境変化に伴う生活の変化に関する研究が挙げられる。栗林（2015）によると、大学生104名に対して大学入学前後の生活変化について調査を行った結果、「対人関係の広がり」、「興味・意欲の拡大」、「外見への関心」、「生活活動の自由度の増大」という4つの生活変化が明らかになった。また、入学からおよそ1年間は、学生が新しい大学環境に適応することが課題になると言われており、友達作りの困難や過剰適応による疲労といった対人関係や学生生活の悩みが生じやすいと指摘がなされている（日本学生支援機構、

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

2 東京成徳大学

2007)。

本研究では、大学デビューを「大学入学を機に意識的に今までとは異なる新しい行動や外見に挑戦すること」と定義し、大学デビュー行動を測定する心理尺度を開発することを通して、大学デビューの実態を明らかにすることを第一の目的とする。

また、適応的な対人関係に関する先行研究において、栗林(2015)は、異性を含む様々な他者との継続的な交流の機会があるかどうか、いくつかの劣等感の側面へ影響すると述べている。さらに、植村・小川・吉田(2001)は学生生活満足感に与える要因として、大学や学部への同一感や居場所感があることを明らかにしている。このように、大学生活に対する満足感や適応は、個人が所属集団との同一感を持ち、他者との適応的な交流を通して得ることができると考えられる。他者との間に支援的な関係を維持できている人は、さまざまなストレスフルな状況に置かれても、支援関係を持たない人よりは、心身の適応状態が悪化しにくい(嶋,1991)ことが明らかになっている。そのため、大学生活において支援的な対人関係を有する学生は、心理的ストレス反応が低いと考えられる。

そこで本研究の第二の目的として、大学デビュー行動の得点の高さが、適応的な対人関係(友人関係満足度)、学校での適応感、ストレス反応、自尊感情に与える影響を検討する。

研究1

目的

大学デビューを「大学入学を機に意識的に今までとは異なる新しい行動や外見に挑戦すること」と定義し、大学デビュー行動を測定する心理尺度の開発を目的とする。

方法

調査対象者 関東圏の大学・短期大学に通う大学生335名(男性128名,女性207名)であった。平均年齢は19.72歳($SD=0.98$)で、学年は1年生40名,2年生197名,3年生75名,4年生23名であった。

調査時期 2015年7月

調査実施手続き 各大学の授業担当教員に質問紙調査への協力を依頼した。教員には、事前に調査の説明を行った。調査に協力してもらえる場合は、担当教員から実施の同意書を得た。担当教員と十分に相談し、授業を受講する学生の学習時間に影響が少ない日時を選び、実施した。質問紙を配布した後に、質問紙に添えた文章を口頭で読み上げながら、調査について説明を行った。①研究の目的,②質問項目には正答はなく、率直に答えること,③心身に影響がないように十分配慮しているが不快になった場合には回答を中断できること,④自由意志による協力で、非協力の場合でも不

利益が生じないこと,⑤協力に同意した場合でも回答の中断・撤回が可能なこと,⑥無記名調査であるので匿名性が保護されること,⑦回答データは厳重に管理し、外部に漏れることがないこと,⑧回答データは統計的に処理され、学会等で発表されること,⑨質問紙の提出をもって、協力への同意とすることを説明した。

質問紙構成 ①フェイスシート 調査対象者の属性(年齢,性別,所属学部学科,学年)について回答を求めた。

②大学デビュー行動尺度 大学デビュー行動を測定するために新たに作成した尺度である。臨床心理学を専門とする大学院生6名で大学デビューから連想する言葉を複数個挙げ、KJ法を行った。KJ法の結果から、大学デビュー行動を測定する項目案を作成した。大学院生14名を対象に予備調査を行い、項目内容の検討、項目の追加を行った結果、18項目を選定した。18項目について、1(全くあてはまらない)から5(よくあてはまる)の5件法で回答を求めた。「大学に入学した後1年間のことを振り返って回答してください」というリード文の後に、「ここでは、大学入学したことを意識してチャレンジしている行動についてお尋ねします。各文章について、自分にどれくらいあてはまるか、最もあてはまると思う選択肢の番号に○を付けてください。」と教示し、回答を求めた。

結果

大学デビュー行動尺度の検討

大学生336名から得た回答を用いた大学デビュー行動尺度の尺度検討を実施した。大学デビュー行動尺度18項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で得点分布の偏りがみられた。しかしながら、得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても大学デビュー行動という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

次に18項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は、6.54, 1.90, 1.14, 1.04, 0.90...、というものであり、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった2項目(明るく社交的と見られるようにふるまっている、SNS(Facebook, Twitter等)の利用が多い)を分析から除外した。再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable1に示す。なお、回転前の2因子で16項目の全分散を説明する割合は42.6%であった。

第1因子は、10項目で構成されており、「自分が目立つようにふるまっている」「異性に積極的に話しかけ

Table1 大学デビュー行動尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

	I	II
I. 積極的な対人関係 ($\alpha=.86$)		
12. 自分が目立つようにふるまっている。	.78	-.09
10. 異性に積極的に話しかけている。	.76	.01
13. 同級生や先輩 (後輩) に好意をもたれるように努力している。	.74	-.05
11. 大学で彼氏/彼女を作るために努力している。	.69	-.01
14. 新しい友人ができるように努力している。	.62	.01
18. 新しいスポーツ, 趣味等を始めたことを積極的に話題にする。	.55	.11
9. 友人にオールをしようと誘っている。	.52	.13
4. 新しいグループに入っている。(同好会, クラブ, etc.)	.50	-.06
2. 飲み会やイベントに積極的に参加している。	.46	.18
15. ちょっと悪い(サボり, タバコ, お酒, ギャンブル等) ことをしていると周りに人に話している。	.46	.04
II. 外見や流行への興味関心 ($\alpha=.82$)		
7. ファッションに力を入れている。	-.13	.86
6. 化粧や身だしなみがよく見えるように努力している	-.10	.81
16. オシャレなエリアやお店に出かけている。	.12	.63
17. 流行を気にして, 情報をあつめている。	.19	.58
1. 新しいヘアスタイルにチャレンジしている。	.06	.56
5. 髪を明るい色に染めている。	.03	.48
	因子間相関	I II
	I	- .56
	II	-

ている」「同級生や先輩 (後輩) に好意をもたれるように努力している」など、積極的に対人交流をもつ内容に高い負荷量を示していた。そこで「積極的な対人関係」因子と命名した。第2因子は、6項目で構成されており、「ファッションに力を入れている」「化粧や身だしなみがよく見えるように努力している」など、自己の身なりや流行へ興味や関心をもつ内容に高い負荷量を示していた。そこで「外見や流行への興味関心」因子と命名した。因子分析の結果および α 係数をTable1に示した。

考 察

研究1の目的は、大学デビュー行動尺度の開発を通して大学デビューの実態を明らかにすることであった。

新たに作成した大学デビュー行動尺度を用いて、大学生を対象とした調査を実施した結果、大学デビュー行動尺度の18項目において「積極的な対人関係」と「外見や流行への興味関心」という2因子が抽出された。算出された α 係数の値は高く、内的整合性を持った尺度であるといえる。

積極的な対人関係因子は、「自分が目立つようにふるまっている (項目12)」、「異性に積極的に話しかけている (項目10)」、「同級生や先輩 (後輩) に好意をもたれるように努力している (項目13)」、「大学で彼氏/彼女を作るために努力している (項目14)」などが

因子負荷の高さを持ち、大学に入学して友人や先輩(後輩)や異性といった他者へ積極的に話しかけたり関わりを求めたりする行動を表していると考えられる。先行研究において、高校から大学への移行に伴い対人関係が広がること(栗林, 2015)や、大学入学当初は友達作りが課題になること(日本学生支援機構, 2007)が指摘されている。大学入学後1年間は、幅広い年代や様々な領域に属する人と関わり、新しい環境で新しい人間関係を構築する時期であるため、新たな人間関係を構築する行動に加えて積極的な姿勢が求められると考えられる。

外見や流行への興味関心因子には、「ファッションに力を入れている (項目7)」、「化粧や身だしなみがよく見えるように努力している (項目6)」、「オシャレなエリアやお店に出かけている (項目16)」などが因子負荷の高さを持ち、大学入学を機に、意識的に身だしなみを整え、流行をつかむために広く情報を集めるといった行動を表していると考えられる。先行研究において、性別や年齢の高低に関わらず容姿に対する自己認知が自己価値を規定する重要な要因となることが指摘されている(平松, 2008)。また、大学生は高校生と異なり制服から私服となり、化粧も自由に行えるようになるが、それに伴い周囲の友人との社会的比較が生じ、自己評価を下げるという指摘もある(栗林, 2015)。大学という新しい環境における自己評価を高めるために、自分の容姿を整え、現代の流行に関する

情報に対して敏感になるといった行動が生じると考えられる。

研究2

目的

大学デビュー行動の得点の高さが、適応的な対人関係（友人関係満足度）、学校での適応感、ストレス反応、自尊感情に与える影響を検討する。

方法

調査対象者 関東圏の大学・短期大学に通う大学生153名（男性55名、女性98名）であった。平均年齢19.90歳（ $SD=0.97$ ）で、学年は、2年生105名、3年生34名、4年生14名であった。

調査時期 研究1と同時に実施した。

調査実施手続き 研究1と同様の手続きをとった。

質問紙構成 ①フェイスシート 協力者の属性（年齢、性別、所属学部学科、学年）について回答を求めた。

②大学デビュー行動尺度 研究1で作成した尺度を用いた。下位尺度は「自分が目立つようにふるまっている」などの項目から構成される10項目（積極的な対人関係）と、「ファッションに力を入れている」などの項目から構成される6項目（外見や流行への興味関心）である。本研究では研究1の結果を受けて、「明るく社交的に見られるようにふるまっている」、「SNS（Facebook、Twitter等）の利用が多い」の2項目を除外して、分析を行った。

③友人満足感尺度 加藤（2001）が作成した友人関係に関する主観的満足感を測る尺度を用いた。項目数は6項目で、1（全くあてはまらない）から5（よくあてはまる）の5件法で回答を求めた。

④大学生メンタルヘルス尺度 松原・宮崎・三宅（2006）が作成した、大学生の全人的な学生生活全体の適応状態を測る尺度を用いた。下位尺度は「学業のつまづき」、「大学への不本意感」、「不規則な日常生活」、「大学生活への充実感の乏しさ」、「自分への自信のなさ」から構成される。項目数は29項目で、1（全くあてはまらない）から5（かなり当てはまる）の5件法で回答を求めた。

⑤心理的ストレス反応尺度（SRS-18） 鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野（1997）が作成した尺度を用いた。下位尺度は「抑うつ・不安」、「怒り・不機嫌」、「無気力」である。項目数は18項目で1（全くちがう）から4（その通りだ）の4件法で回答を求めた。

⑥自尊感情尺度 Rosenbergが作成した自尊感情尺度の日本語版（山本・松井・山成、1982）を使用した。項目数は10項目で、1（あてはまらない）から5（あてはまる）の5件法で回答を求めた。

結果

尺度の信頼性および尺度得点の算出

大学デビュー16項目の内的一貫性を検討したところ、十分な信頼性（ $\alpha=.85$ ）が確認されたため、16項目の得点を合計し、大学デビュー行動得点を算出した。また、下位尺度の内的一貫性を検討したところ、十分な信頼性（積極的な対人関係10項目： $\alpha=.86$ ；外見や流行への関心6項目： $\alpha=.82$ ）が確認されたため、各項目を合計し、積極的な対人関係得点、外見や流行への関心得点を算出した。

大学生のメンタルヘルス尺度29項目の内的一貫性を検討するため、信頼性の分析を行った。その結果、全項目は $\alpha=.80$ 、各下位尺度については、学業のつまづき5項目（ $\alpha=.78$ ）、大学への不本意感5項目（ $\alpha=.60$ ）、不規則な日常生活6項目（ $\alpha=.84$ ）、大学生生活への充実感の乏しさ6項目（ $\alpha=.40$ ）、自分への自信のなさ7項目（ $\alpha=.73$ ）となり、大学生生活への充実感の乏しさ以外の下位尺度はおおむね十分な信頼性が確認された。内的一貫性が確認されたため、全項目と、各下位尺度の合計得点を算出した。大学生生活への充実感の乏しさは、内的一貫性が低かったが（ $\alpha=.40$ ）、先行研究にない、同様に合計得点を算出した。

新しい心理的ストレス反応18項目の内的一貫性を検討するため、信頼性の分析を行った。その結果、全項目は $\alpha=.94$ 、各下位尺度については、抑うつ・不安6項目（ $\alpha=.88$ ）、不機嫌・怒り6項目（ $\alpha=.89$ ）、無気力6項目（ $\alpha=.83$ ）となり、十分な信頼性が確認された。内的一貫性が確認されたため、全項目と、各下位尺度の合計得点を算出した。

友人関係満足感尺度6項目の内的一貫性を検討するため、信頼性の分析を行った。その結果、6項目全体の α 係数は $\alpha=.84$ で十分な信頼性が確認されたため、全ての項目を合計し、尺度得点を算出した。

自尊感情尺度10項目の内的一貫性を検討するため、信頼性の分析を行った。その結果、10項目全体の α 係数は $\alpha=.85$ で十分な信頼性が確認されたため、全ての項目を合計し、尺度得点を算出した。

大学デビュー行動得点と各変数の関連の検討

大学デビュー行動と適応との関係について検討するため、相関分析を行った。その結果をTable2に示した。その結果、大学デビュー行動得点は、友人関係満足度と有意な相関がみられた（ $r=.24, p<.01$ ）。

大学デビュー行動と有意な正の相関がみられた適応指標（友人関係満足度）との関係をさらに検討するために、友人満足感得点を基準変数、大学デビュー行動得点、自尊感情得点、ストレス得点、メンタルヘルス得点を説明変数とした重回帰分析を行った。解析はステップワイズ法による。重回帰分析の結果をTable3に示した。その結果、大学デビュー行動合計得点から

Table 2 大学デビュー行動と友人満足感, 自尊感情, ストレス, 大学生メンタルヘルスとの相関関係

	大学デビュー 行動	友人満足感	自尊感情	ストレス	大学生 メンタルヘルス
大学デビュー行動	—	.24**	.12	.01	.02
友人満足感		—	.43**	-.32**	-.44**
自尊感情			—	-.49**	-.54**
ストレス				—	.53**
大学生メンタルヘルス					—

***p* < .01

Table3 友人満足感尺度に対する重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数
大学デビュー行動	.22**
自尊感情	.23*
メンタルヘルス	-.34**

***p* < .01 **p* < .05

友人満足感得点への標準偏回帰係数が1%水準, 自尊感情得点から友人満足感得点への標準偏回帰係数が5%水準, メンタルヘルス得点から友人満足感得点への標準偏回帰係数が1%水準で有意であった ($R^2=.29$, $p<.01$)。そこで今度は大学デビュー行動と友人関係満足度の関連についてより詳細な検討を行うため, 性別ごとに大学デビュー行動の下位尺度が友人満足感に与える影響を検討した。大学デビュー行動下位尺度である外見や流行への興味関心を説明変数として, 友人関係満足度得点を基準変数とする単回帰分析を性別ごとに行った。その結果, 男性では有意なパスが得られなかったが (外見や流行への興味関心 $\beta = -.04$, $R^2 = .02$, *n.s.*), 女性は1%水準で有意な値が得られた (外見や流行への興味関心 $\beta = .48$, $R^2 = .22$, $p < .01$)。

大学デビュー行動各群と性別が各適応指標に与える影響の検討

大学デビュー行動が高い人, 低い人の特徴を検討するために, 大学デビュー行動得点により群分けを行った。平均値 ($M=38.34$) を基準に, 平均値+1SD以上を大学デビュー高群 ($n=20$), 平均値+1SDから平均値-1SDまでを大学デビュー中群 ($n=97$), 平均値-1SD以下を大学デビュー低群 ($n=32$) と設定した。

大学デビュー行動得点群 (低/中/高) と性別 (男/女) を独立変数とし, 友人関係満足度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果, 各要因の主効果は認められなかったが, 交互作用が有意であった ($F(2, 143)=3.15$, $p<.05$)。単純主効果の検定を行ったところ, 大学デビュー得点が低い群において, 男性は女性よりも友人関係満足度の得点が有意に高かった ($p<.05$)。各群, 性別ごとの友人関係満足度の平均値をFig.1に示した。

大学デビュー行動と性別がストレスに与える影響を検討するために, 大学デビュー行動得点群 (低/中/高) と性別 (男/女) を独立変数とし, 心理的ストレス反

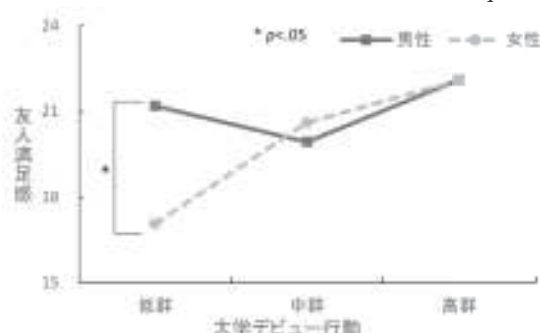


Fig.1 大学デビュー各群と性別における友人満足度の平均値

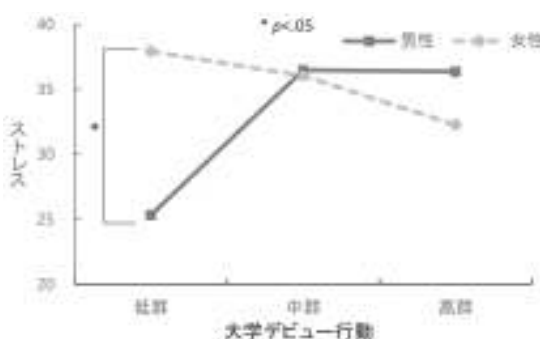


Fig.2 大学デビュー各群と性別におけるストレス得点の平均値

応尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果, 各要因の主効果は認められなかったが, 交互作用が有意であった ($F(2, 137)=3.64$, $p<.05$)。単純主効果の検定を行ったところ, その結果, 大学デビュー得点が低い群において, 男性は女性よりもストレス得点が有意に低かった。各群, 性別ごとのストレス得点の平均値をFig.2に示した。

その他の適応指標変数 (大学メンタルヘルス, 自尊感情) についても, 同様に分散分析を行った結果, 各要因の主効果, 交互作用はみられなかった。

考察

研究2の目的は, 大学デビュー行動尺度の得点の高さが, 適応的な対人関係, 学校での適応感 (メンタルヘルス), ストレス反応, 自尊感情に与える影響を検討することであった。

相関分析の結果、大学デビュー行動得点は友人関係満足度と有意な正の相関が見られた。大学デビュー行動得点は、その他の適応指標（大学メンタルヘルス、ストレス、自尊心）との相関は有意ではなかった。先行研究によると、大学不適応に直接影響する要因は、授業理解の困難さや入学目的の明確さであるが、友人関係の良好さが大学への愛着を媒介して大学不適応に影響を及ぼすことが示されている（中村・松田, 2013）。本研究においても、友人関係満足度得点は大学メンタルヘルス得点と負の相関が見られ、友人関係への満足感が高いほど、大学適応がよいという結果が得られた。このことから、友人関係満足度得点と大学生活の適応感を表す指標として用いると、大学デビュー行動を行っていた大学生は良好な友人関係に恵まれ、大学生活の不適応が低いと推察される。

次に、男女における大学デビュー行動得点の高群、低群の特徴の検討を行った。分散分析の結果、大学デビュー得点が低い群において、男性は女性よりも友人関係満足度が高く、ストレス反応が低かった。大学生が属する青年期の交友関係においては性差が指摘されており、男性は活動での達成感を重視し、交際や共有活動などを通して親密さを感じる一方で、女性は友人に対して相互依存することを期待し、お互いの気持ちを察し合い、他者や物事に対する感情を納得のいく形で共有する情緒的に結びついた関係であると言われていた（廣實, 2002）。そのため、男性においては大学デビュー行動の有無よりも入学後の友人との共有活動が友人関係の満足感に大きく影響を与えたと考えられる。一方、女性においては、外見や流行に関心を持ち、積極的に交友関係を広げるといった活動を通して、似たような価値観を持った仲間と同じ楽しみを共有することが友人関係の満足感に影響を与えたと考えられる。したがって、本研究において性差が見られたことは、先行研究の知見とも一致しているといえる。また、性差によってストレス反応に違いが生じた点について、嶋（1992）によると、ソーシャルサポートの持つストレス緩和効果の現れ方は性別によって異なることが指摘されており、特に女性においてソーシャルサポートの主効果が大きな意味を持つことが明らかになっている。このような性差が生じるのは、対人関係に対する態度に男性と女性とでは異なる社会的・文化的期待が課せられているため、男性の場合、低いサポート状態でも比較的心的不適応になりにくいからである（嶋, 1992）と想定されている。したがって、大学デビュー行動により新しく形成された友人関係は、特に女性において、その後の大学生活における支援的資源として機能し、心理的ストレス反応を低減させていると考えられる。そのような性差は、大学デビュー行動尺度の下位尺度である「外見や流行への興味関心」を用いて回帰分析した結果からも認められた。具体的

には、女性にのみ、外見や流行への興味関心から友人関係満足度への有意な正のパスがみられ、興味深い結果が得られた。思春期において、女性はチャムシップという集団＝友人関係を作ることによって満足を得る傾向がある。チャムシップは一種の同調行動であると考えられ、五十嵐・野村・岩崎（2014）によると、同調行動消極群は同調行動積極群に比べると、相手からの嫌悪感や拒絶への不安あるいは疎外感を強く体験していることが明らかになっている。ファッションやメイクを流行に合わせて変えるといった行動は同調行動のひとつとして捉えることができるため、女性にとっては友人関係を築くうえで、外見や流行への興味関心を持っているかどうか重要なポイントとなっていることが想定される。

今後の課題

本研究では、大学デビューを「大学入学を機に意識的に今までとは異なる新しい行動や外見に挑戦すること」と定義し、大学デビュー行動を測定する心理尺度を開発することを通して、大学デビューの実態を明らかにした。また、大学デビュー行動尺度を用いて、他の変数との関連を調査することにより、大学デビュー行動と大学生活における適応感との関連を明らかにした。しかしながら、以下の点が本研究の課題として考えられる。

まず、大学デビュー行動尺度の作成について、尺度作成にあたって質問紙を配布したのは特定の大学の特定の学科のみであった。そのため、尺度の検討の際には、いくつかの質問項目で得点分布の偏りがみられた。また、今回の調査における調査対象者は大学生としており、その学年については限定していない。大学デビュー行動は入学を機に見られる行動であると定義しているため、本来であれば新生を対象とすべきであろう。これらのことから、大学デビュー行動尺度の信頼性をさらに高めるために、複数の大学・学部の新生を対象とした調査が求められる。

次に、大学デビュー行動と大学生活における適応感との関連について、今回の調査においては大学生メンタルヘルスと自尊感情に有意な差は見られなかった。その理由として、第一にサンプル数が十分でなかった可能性がある。上記のとおり、今回の調査は特定の大学・学部の学生を対象としたため、調査人数が少なく、統計的有意差が生じなかった可能性がある。第二に、大学デビュー行動と大学生メンタルヘルス、自尊感情との関連仮説に無理があったのではないかという可能性がある。特に自尊感情については、大学デビュー行動によって自己評価の向上が生じ、自尊感情も高まるといった仮説を立てたが、今回の調査においてはこの仮説を支持する結果が得られなかった。これらのことから、仮説を再度吟味したうえで、サンプル数を増やし、

調査を行う必要がある。

引用文献

- 独立行政法人日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」— Retrieved from <http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuhosaku.html> (2015年7月13日)
- 平松 隆円 (2008). SPPCモデルによる大学生の自己概念の検討, 佛教大学大学院紀要, 36, 77-89.
- 廣實 優子 (2002). 現代青年の交友関係に関連する心理的要因の展望, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 51, 257-264.
- 五十嵐 透子・野村 珠紀・岩崎 眞和 (2014). 大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連 上越教育大学研究紀要, 33, 107-114.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 栗林 克匡 (2015). 大学入学前後の生活変化が劣等感に及ぼす影響 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 52, 1-10.
- 松原 達哉・宮崎 圭子・三宅 拓郎 (2006). 大学生のメンタルヘルス尺度の作成と不登校傾向を規定する要因 立正大学心理学研究所紀要, 4, 1-12.
- 松村 明 監修 (2012). デビュー [(フランス)debut] goo辞書 (提供元 デジタル大辞泉)RetIHeved from <http://www.dictionary.goo.ne.jp/jn/152289/meaning/mOu/> (2015年7月13日)
- 文部科学省 (2014). 学校基本調査—平成26年度(確定値)結果の概要— Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1354124.htm (2015年7月13日)
- 中村 真・松田 英子 (2013). 大学生の学校適応に影響する要因の検討 江戸川大学紀要, 23, 151-160.
- 西垣 順子・小林 正信 (2004). 大学生生活への適応状況に関連する要因についての調査 信州大学教育システム研究開発センター紀要, 10, 25-35.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39 (4), 440-447.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7 (1), 45-53.
- 鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右馬 塾力也・坂野 雄二 (1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4 (1), 22-29.
- 植村 善太郎・小川 一美・吉田 俊和 (2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (2) —大学生の学習への取り組み, および大学生生活満足感に関連する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 48, 29-43.
- 山田 ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2015). 2014年大学生の意識調査概要報告 Retrieved from <http://www.univcoop.or.jp/press/mind/report-mind2014.html> (2015年7月13日)

—2016.1.29受稿, 2016.3.12受理—

Effect of “University Debut Behavior” on adjustment to university life

Rei NAKADAI (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kotoko ISHII (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Koji SEKI (*Master Program in Psychology Tokyo Seitoku University*)

Toshihiko SENSUI (*Tokyo Seitoku University*)

The first purpose of this study is to define the university debut behavior as "challenge new and different behavior or outward appearance on the occasion of the college enrollment", and examine the reality of the present-day college student image through developing a new scale for measuring the university debut behavior. Total of 335 college students (128 males, 207 females, mean age = 19.72) completed a questionnaire. Exploratory factor analysis indicated that university debut behavior scale composed of 18 items with two factors, “active interpersonal relationship” and “the interest to the appearance and the fashion” . The second purpose of this study is to examine the relationship between the university debut behavior and the adaptation in college life, therefore the relationship between the university debut behavior and other variables such as friendship satisfaction, self-esteem, stress response, and college student mental health were examined. As a result, the university debut behavior was positively correlated with friendship satisfaction. Especially at the subscale of “the interest to the appearance and the fashion” , only women have relation to friendship satisfaction rating. Following the findings, the reality of the present-day college student image was discussed.

Key words: university debut behavior, friendship satisfaction, stress reaction

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2016, Vol. 15, pp. 30-37